

## 令和6年度 学力向上プラン（留意点入）

学校名 中央区立佃中学校

## 学校の教育目標

- |                |                 |                |
|----------------|-----------------|----------------|
| 1 深く考え 実行する生徒  | 2 自ら学び 伸びていく生徒  | 3 励まし合い 助け合う生徒 |
| 4 礼儀正しく 規律ある生徒 | 5 個性豊かで たくましい生徒 |                |

## 教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

- ・中央区教育研究指定校としての取組をはじめ、日々の実践的な研究・研修を通して、教職員の質の高い授業力・経営参画力を高め、学習指導を充実する。
- ・「なぜ」「どうして」という生徒の疑問を引き出し、その課題を協働して解決していく対話的な学びの過程を重視し、教科の目標達成とコミュニケーション能力の向上を図る。
- ・学校図書館やタブレット端末等のICT機器を計画的に利用し、学習の基盤となる「読解力」や「推測する力」、「情報活用能力」を育成する。
- ・学習につまずきのある生徒に対する具体的な支援策を探り、「個別最適な学び」を進める。
- ・国や都、区の学力に関する調査の結果を分析して学力向上推進プランを作成するとともに、生徒による授業評価を実施し、授業改善を図る。
- ・利用しやすい学校図書館運営や読書活動を充実し、読書への興味・関心を喚起する。

## 令和6年度「学習力サポートテスト」や令和6年度学力向上プランの検証結果、学校評価の結果等によって明らかになった課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和6年度「学習力サポートテスト」の「標準スコアによるカテゴリー間の比較」によると、どの学年も「我が国の言語文化に関する事項」の正答率が全国・区の平均よりも4.1%・5.0%低くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古典特有の単語の理解に苦手意識をもっており、当時の文化を踏まえた上での読解ができていない。</li> </ul>
算数・数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和6年度「学習力サポートテスト」の平均正答率は、全国平均正答率をすべて上回っている。(1年:+3.2%, 2年:+5.3%, 3年:+8.5%)</li> <li>・第1学年では、区平均を2.2%下回っており、特に図形の問題の正答率が区平均と比べても低い。</li> <li>・第2,3学年では、区平均をそれぞれ1.4%, 1.7%上回っているが、文字式や方程式の問題の正答率が他の問題と比べ低い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・図形領域においては、言葉の定義やなぜその計算が成り立つのかということがあやふやなままのため、空間図形などの基礎的な計算ができていない。</li> <li>・代数領域においては、計算方法や立式方法を知識として覚えてしまっているため、単純な文字式や方程式は計算できるが、複雑な形や文章から方程式を立式することができていない。</li> </ul>
社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和6年度「学習力サポートテスト」の全体の正答率は全国平均を下回っている。特に「知識・技能」の問題の正答率が、学年が上がるにつれ、低くなっている。</li> <li>・点数の分布を見ると、1年生は上下の幅が広く、最も多いのが50点台となっている。3年生も最も多いのが50点台である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業を聞いているだけで、アウトプットを行う機会が少ないため、知識が定着していない。</li> <li>・知識が定着していないため、知識の活用が出来ず、応用問題の正答率も悪くなっている。</li> </ul>
理科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和6年度「学力サポートテスト」の全国平均正答率が下回っており、観点別に見ると2学年の「主体的に学習に取り組む態度」以外は全国平均を下回っている。</li> <li>・全国平均正答率と比べて特に低い領域は1学年は「物質・エネルギー」(-4.6%)、2学年は「生命」(-14.5%)、3学年は「地球」(-9.1%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・用語は知っているもそれを説明できるほど定着していない。基礎の定着が必要である。</li> <li>・基礎的な計算問題を定着させる演習量が足りていない。</li> </ul>

	となっている。	
英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和6年度「学習力サポートテスト」の平均正答率は、区の平均正答率を1年生は下回っており、2、3年生は上回っている。(1年:-2.8 2年:+0.7 3年: +3.9)</li> <li>・1年生では、「読む」領域の問題の正答率が下がっている。</li> <li>・2,3年生では、「書く」領域の問題の正答率が下がっている。</li> <li>・英語が苦手な生徒が、既習の単語や文法がわからず、授業中学習に取り組めないことがあった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション活動を多く設定しようとした結果、読む活動や書く活動の機会が少なくなってしまうことが要因のひとつと考える。</li> <li>・英語を苦手とする生徒に対するフォローアップは補習等で行っているものの、生徒の理解度の把握を英語科全員で共有することが逐一できなかった。</li> </ul>
体育・保健体育	<p>全体的に運動嫌いな生徒が多く、課題に対して主体的に粘り強く取り組む生徒が少ない。反面球技などの楽しめる活動に関しては、課題以外のところで楽しめる要素も見受けられる。</p> <p>体力の全体的な低下。</p>	<p>単純なトレーニングや走ることに對しての抵抗感や無気力感がある生徒がいる。</p> <p>時代と共に体力の低下が考えられる。</p>
学力向上に向けた視点		年度末までの目標及び指標
①各教科	国語	・令和7年度「学習力サポートテスト」の正答率が令和6年度の結果を上回るようにするとともに、古典の授業が嫌いな生徒の比率を下げるように努める。
	算数・数学	・令和7年度「学習力サポートテスト」の正答率が令和6年度の結果を上回るようにする。
	社会	・令和7年度「学習力サポートテスト」の正答率が令和6年度の結果を上回るようにする。
	理科	・令和7年度「学習力サポートテスト」の正答率が令和6年度の結果を上回るようにする。
	英語	・令和7年度「学習力サポートテスト」の正答率が令和6年度の結果を上回るようにする。
	体育・保健体育	保健体育の授業が嫌いな生徒の比率を下げる。 振り返りや自分の課題に気づく・解決する姿勢を身につける。
②授業改善	学校評価アンケート等において、「授業改善に努めているか」という項目が生徒・保護者ともに85%を目標とする。	
③家庭との連携	保護者アンケートにおいて、1時間以上家庭学習をしている生徒（塾等を含む）が1年生では50%以上、2年生では60%以上、3年生では70%以上を目指す。	
④体力向上	令和7年度の新体力テストの結果が東京都の平均値を超えるように、各種目に応じた体力の要素を踏まえた練習、トレーニングを実施していく。	



## 【目標達成のための具体的な取組内容】

①各教科	
国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単元の最終授業で効果的な振り返りを行う。</li> <li>・小テストを行い、知識の定着を図る。</li> </ul>
算数・数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・習熟度別少人数授業を行い、区講師と連携して机間指導を行い個に応じた指導を充実させる。</li> <li>・生徒が主体的に学習に取り組めるように問題解決型の授業を多く取り入れる。</li> </ul>
社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回の授業で効果的な振り返りを行う。</li> <li>・小テストを行い、知識の定着を図る。</li> </ul>
理科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の振り返りを行い、学習内容を説明できるようにする。</li> <li>・計算問題の演習を行う。</li> </ul>
英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・習熟度別少人数授業を行い、区講師と連携して生徒の理解度を把握しながら個に応じた指導を充実させる。</li> <li>・生徒が主体的に学習に取り組めるように ICT 機器などを活用して、理解を深める。</li> </ul>
体育・保健体育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健の知識では、タブレットを活用しゲーム性のある内容で興味・関心を高め理解を深める。</li> <li>・実技では、自分自身の課題に対してどれくらいの改善が見られたかを評価できる内容や学習カードを作成するようにする。</li> </ul>
②授業改善	
取組Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価アンケートや研究授業、公開授業、授業評価アンケートの報告会等を実施し、教員相互による検証を行う。また、研究とも関連させ、校内研修会の中で改善策の検討および共有を図っていく。</li> </ul>
取組Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評議員会の外部評価を踏まえ、職員会議や教科部会の中で改善策の検討および共有を図っていく。</li> </ul>

③家庭との連携	
取組Ⅰ	三者面談において、各教科の提出物の提出状況や実施状況などを確認する。また、希望者を対象に教科面談を実施。また状況に応じた個別面談を行う。
取組Ⅱ	毎日の生活記録、定期考査前の学習計画表の活用、ノート提出などの点検活動、各教科からの課題等により家庭学習の習慣化や質の向上を図り、自発的な学習習慣を身に付けさせる。学校評価アンケートにより検証する。

④体力向上	
取組Ⅰ	補強運動などが、楽しみながら高める事ができる体力を、遊びを通して培うように計画する。
取組Ⅱ	学校全体で取り組めるスポーツ大会のようなレクを企画したり、生徒が主体的に活動出来る場を増やしたりするようにしてみる。



## 【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点		取組の成果	取組の課題及び解決策
①学力基盤	国語	語句の意味の学習の徹底と、言語活動の促進を徹底した。授業評価アンケートやテストの結果から、語彙力の向上と意見を示す活動への意欲と達成感が見受けられた。	「書く力」に課題がある。漢字、文法、語彙などの知識が不十分であること、文章の構成をつくる活動が不足しているためと考えられる。次年度以降も、「書く」活動を積極的に取り入れたい。
	算数・数学	習熟度少人数授業によって定着度に応じた指導を行った。また、授業評価アンケートにおいては、授業の進め方に関する生徒の評価は高い。生徒それぞれに合わせた指導を行うことができていると考えられる。	授業評価アンケートにおいて、「授業は好きである」という項目が他の評価平均と比べ低い傾向にある。今年度校内研究において進めてきた PBL の実践を今後も進め、生徒の興味を引く授業を行っていく。
	社会	授業で小テストを実施したことにより、家庭学習で社会の勉強をする生徒が増えた。また、授業の最後に、自分の言葉で授業の内容をまとめたり、問いの答えを考えたりすることで、徐々に、自分の意見を表現できる生徒が増えた。	依然、基礎基本的な知識の定着には課題が見られるため小テストの出題範囲やタイミングを精査していきたい。また、ふりかえりの内容を共有する時間がとれていなかったため、確保していきたい。
	理科	実験の目的を意識させながら取り組む必要があると感じた。また、計算演習時間を設けることで定着させることができた。	実験において、意見の共有など対話的に実験に取り組ませる。実験結果を科学的に分析させ、わかったことを伝えることができるように授業計画を行う。
	英語	単元ごとに、文法や表現に関する小テストを行い、こまめに学んだ内容の復習を行った。授業内では、パフォーマンステストなど、話す機会を多く設けた。	積極的に英語をアウトプットしようとする姿勢はみられるものの、ライティングの力がまだ不十分である。自分が伝えたいことを英語で表現できるようになることが今後の課題である。
	体育・保健体育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲーム性のあるコンテンツは非常に有用性が高かった。</li> <li>・ICT を活用した学習カードを見直すことで、自分の実技の動画を振り返り、体力向上につながった。</li> </ul>	ICT で実技テストを提出する場合に、通信速度などの改善があれば、ICT での提出はより素晴らしい物になる。タブレット PC ではなく、IPAD の方が、速度、充電の持続力などが高いので、非常に良いと思う。また、様々な職員の経験から、ロイロノートの導入も検討したほうがよいと感じた。
②授業改善	年 1 回生徒による授業評価アンケートを実施するとともに、その結果を教科ごとに分析し、研修会を行った。生徒との信頼関係を作りながら授業改善を進めることができた。	日頃より他教科の授業を積極的に参観して、意見交換を行う時間を多く設け、それぞれの生徒を深く理解し、個別最適化された授業の展開を進めていく必要がある。生徒一人ひとりの学びが十分に保障できるよう更に授業研究を進めていく。	
③家庭との連携	家庭学習の時間について、定期考査前に課題を提示することにより、生徒の家庭学習の時間は各学年おおむね確保されていることが学習計画表等から読み取れた。家庭への連絡を密にしたことで、保護者にも理解と協力を得られた。	定期考査前は家庭学習の時間は確保できているが、そうではない期間の学習時間の把握が必要と考える。各教科で課題を出す等、ICT 機器を一層活用しながら取り組む。面談等を通して、家庭での様子をヒアリングしていく。	
④体力向上	基本的な要素（腕立て、腹筋、背筋、スクワット）から、ゲーム性を持たせる取り組みを行うこと	授業の内容に即したトレーニングを実践していく。小学校から継続した体力向上の取組を行な	

	で、単なる筋トレから楽しみをもって活動することができた。	う。
--	------------------------------	----